
幸せドンとスマイル

ヒツジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せドンとスマイル

【Nコード】

N6344I

【作者名】

ヒツジ

【あらすじ】

「わたしたちはいつから、一緒にいた？」

「僕らはずっと一緒だったんだよ」

「……覚えてない。わたしは何も、覚えていない、よ」

「大丈夫、僕がキミを、覚えている」

「そう、か、だったらわたしは——　　いったいどんなやつ、だった？」

「ああ、キミはきっと、今と同じように、本当に笑顔の似合う、

かわいい女の子だったんだよ」

五作目 SF 短編ショートショート。
遠い遠い笑えない話。

四角い白の箱の中。

閉じ込められていた、二人。

僕のほうがキミよりも数百年早く目覚めた。

この世界には最初から何も無く、何も残されておらず、何も始まらない。

あるものは膨大な遊び道具と、それらを遊び切るほどの時間が過ぎ去っても尚、余りある食料と水。

今の世界には僕しかない。

僕はキミの目覚めを待っている。

海。

星の海。

漂い、進む。

その先にむかっている。

初めて目覚めたとき、そばにいた先輩は、そう、僕に教えてくれた。

僕ら、は本当に長い時間を、そうやって連なって生きてきたのだと。

先輩の先輩が教えてくれたように、先輩は僕に教えてくれた。

「——けれどもう、お前から最後までいたいだから、もしかしたら私達はその場所には辿り着けないのかもしれないな」

見れば、白い箱は僕と彼女のものしか残っていないなくて。

先輩のものは、もうなくなってしまったのだと言った。

僕が目覚めたことで、先輩の箱は必要を無くしてしまったのだと。いくら長くても、僕たちには寿命があつて。

それが尽きれば、いなくなる。

だから先輩にはもう、帰る場所、は必要なかったのだ。

「もしも、私たちが生きてきた意味、を果たせるとしたら、それは私でもお前ではなく、今もまだ寝ている、そばのソイツなんだろうな」

そうして、何時だったか。

そんな風に、何処かさびしげに笑んだ先輩は。

最初から、そんな誰かはいなかったようにして。
いなくなっていた。

僕は、一人になった。

長い長い時間。

僕は一人だった。

だから、僕は本を読む。

箱の外に積まれていた、箱の外の外の話。

物語は慰めになった。

そこにはたくさんの、誰かがいた。

僕はその中に、自分の存在を投射して、遊んだ。

それでも世界は満ちていた。

僕はソレしか知らなかった。

キミが目覚めた日。

僕を見つけて、ここは何処、と聞いた。

僕は少しでも考えて、意地悪く、何時か読んだ物語の内容のように、ひとつだけなら、どんな質問にだって答えてやる、と返す。

だから、その質問で本当にいいのか、と聞いた。

彼女は虚ろに僕を見て。

質問ではなく、ただ、僕の意見を聞くように。

——わたしが、幸せになれる未来は、あると思うか、と聞いた。
その質問に僕は、あるんじゃないかな、と答える。

笑って、どうしようもなく笑えて。

だって、そんなものは、もう。

きつと。

僕の嘘の中ですか。

ありはしないのだから。

僕は彼女に世界を見せる。

綺麗な世界を。

箱の外の世界を、何時か読んだ本で想像した通りに、創造する。

彼女は何も知らない。

僕が何も知らなかったように。

幸い、僕らには言葉があつて、長い、長い、時間があつた。

彼女の疑問とするだろうことには何にだって答えられた。

嘘を真実として、刷り込ませた。

彼女の望む、幸せな未来を創つた。

そんなとき、僕は笑つた。

笑えた。

僕が。

僕自身を笑っていた。

「あなたは、良く、笑うけれど」

ある日、キミは僕に問いかけた。

「しあわせか？」

答える。

「うん」

笑えた。

どうしようもなく。

僕は、最初から幸せだった。

キミが目覚めることを信じて待っていた時間も、こうしてキミと、
出会つことが出来た今も。

それだけで良かったんだ。

それしかいらなかったんだ。

だから、キミは何も知らなくていいんだよ。
僕が知ってしまったことも。

僕らがこれからどうなるのかも。

不幸な世界は、必要ない。

幸福なだけの世界が君を待っている。

キミは僕だけの王女様になっってはくれませんか。

そうしたら、僕はキミのためだけに生きるよ。

「わたしたちはいつから、一緒にいた？」

「僕らはずっと一緒だったんだよ」

「…………覚えてない。わたしは何も、覚えていない、よ」

「大丈夫、僕がキミを、覚えている」

「そう、か、だったらわたしは——— いったいどんなやつ、だった？」

「ああ、キミはきつと、今と同じように、本当に笑顔の似合う、かわいい女の子だったんだよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「…………… だったら、笑う。あなたが望むように、わたしは、笑うよ」

「ああ、ありがとう——— キミは、本当に、笑顔が似合うね」

物語の終わり。

キミが箱を出て、しばらく。

僕はもうすぐ消えるから。

キミは僕を笑うだろうか。

嘘だけを吐き続けた滑稽なピエロと。

憎むだろうか。

自己満足ばかり肥やした偽善者と。

僕らにはもう、今更愛も恋も残ってないだろうか。

僕はただ、キミの笑顔が見たいだけ。
だから、そつと、キミに語りかける。
キミが少しでも長く、笑っていられるように
今はソレだけを願って。
大好きなキミへ。
嘘だけの物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344i/>

幸せドンとスマイル

2011年10月5日23時44分発行